

平成30年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (H30.5.)

ミッション	時代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ○学生・研修生の円滑な就農の支援 (個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化) ○GLOBAL G.A.P.の実践と日本梨における認証取得

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
1	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約5割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 <年次別就農率> H25:50%、H26:80%、 H27:61%、 H28:70%、H29:67% (5か年平均65.3%)	1 ・学生の就農率65%	1 ・就農支援関係機関との情報(求人、求職、研修)共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関との意見交換会の開催	
		2 研修生に対する的確な進路指導の実施	1 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	1 ・アグリチャレンジ研修生の就農率:70% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率(修了時):80%	1 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	
2	学生・研修生の確保	1 農業大学校の魅力発信 2 農業高校との連携による学生確保 3 IJUターン就農者の掘り起こし	1 養成課程入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 <入学者数の推移> H26:23名、H27:23名、H28:21名、H29:22名、H30:24名)	1 入学者数 定員30名確保	1 ・オープンキャンパス(4回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・高等学校進路指導研究会への参加および県内高校訪問(全校) ・各高校で実施の進路ガイダンスへの参加 2 ・オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・農高生対象の就農イメージ相談会の開催 ・農業高校教員の内地留学研修の受入れによる農高生の農大進学への動機付けと農大指導職員の教育力向上 ・農高生の職業観の醸成と農業分野への進路に繋げる食プロ育成講座受講受入れおよび長期インターンシップ受入れ先の選定支援 ・農業教育研究会(教育委員会)での学校紹介および情報交換 3 東京(3回)・大阪(4回)等での就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	・高校3年になると自身の進路をゆっくり考える余裕がない。2年生の間に進路選択の機会になるようオープンキャンパスを冬に開催してはどうか。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
3	学生の総合的経営能力の向上	<p>1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実</p> <p>2 計算能力を含めた基礎学力の向上</p> <p>3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上</p> <p>4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める</p> <p>5 GAPに関する講義の導入及びH30認証取得</p>	<p>【養成課程共通】</p> <p>1 学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。</p> <p>2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。</p> <p>3 多様化する農業形態のなかで営農するためには、コースを枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚をもった農業者を育成する必要がある。</p> <p>4 非農家出身の学生割合が高くなっていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。</p> <p>5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識の高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）に関する教育が必要となっている</p>	<p>1</p> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生学力補完補講座（合格水準達成率向上：25%→100%） <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内技術競技実施（2回） 農大市実施（校内3回、校外3回） 修農祭での販売（1回） <p>4</p> <p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生対象にした講義（10回） GAP認証取得（果樹・日本梨） 	<p>1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図り、学生の苦手分野を克服、作業時間を含むコスト意識の醸成するための指標として活用する。理解度アンケートの実施（7月、1月 2回）とそれを基にした個別指導（随時）</p> <p>2 1年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生学力補完補講座（20回） 学力テスト（随時） 専攻実習時の実戦力評価（随時） <p>3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校内外で「農大市」を実施し、商品PR方法を学び、対面販売を行うことで消費者ニーズを把握する。</p> <p>4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース 2回以上）</p> <p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年10回実施 この学習の成果目標として、今年度は「日本梨」での認証取得を目標とする。 	<p>・授業中に学生がミスをした場合、それが事故に繋がらないように、ミスをした学生だけでなく、全体で確認、共有することが大事。</p> <p>・一般消費者に売ることの難しさ、自信を持って得ることなど引き続き取り組んで欲しい。</p> <p>・沖縄農大は経営について教えていた。しかし、経営は実際に携わってみないと分からないもの。一握りでも理解する学生ができれば良い。</p> <p>・経営には山もあれば谷もあることを教えて欲しい。</p>

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
4	学生の専攻 営農技術の 向上	<p>【果樹】</p> <p>1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成</p> <p>2 新技術、新品種に係る技術習得</p> <p>3 GLOBALG.A.P.の取り組み</p>	<p>永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。</p> <p>本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る</p> <p>国際基準であるGLOBALG.A.P.への関心、取り組みが、全国的に広がっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>1 【1,2年共通】 理解度アンケートでほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上</p> <p>【2年次】 ・作業説明の評価として学習チェックの活用</p> <p>2</p> <p>3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（認証取得）</p>	<p>1 「1,2年共通」 ・1人に1樹ジョイント二十世紀の担当樹を割り当て、年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のための小テスト実施</p> <p>「2年次」 ・各学生の担当樹種を決定する。各樹種の管理作業を行う際は目的、方法等を担当の学生が他の学生に説明する。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。</p> <p>2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等の参加（4回程度/年） ・新技術であるナシの「ジョイント仕立て」の栽培管理に対して、全学生が関わりをもつために担当を決定し、技術習得、向上を目指す。</p> <p>3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、学生内でグループを作り、役割分担をしながら改善活動を実施する ・全ての日本梨圃場及び関連施設に対する活動実施</p>	<p>・新しい技術は学内で取り組めないものもあろうが、試験場やメーカーなどと協力して新技術に触れる機会を持って欲しい。</p>

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【野菜】</p> <p>1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成</p> <p>2 環境保全型農業の実践</p> <p>3 GAPの取組</p>	<p>1 コースの学生13名のうち、農業高校以外の出身者が10名(76%)、また、非農家の学生が8名(60%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援を進めている。</p> <p>将来的な独立就農の意向を現段階で5名(38%)の学生が示しており、実習のレベルを個別的就農目的に合わせて充実させることが重要である。</p> <p>2 環境負荷を軽減する農業への関心を示す学生もおり、これらのニーズに対応した実習を行う必要がある。</p> <p>3 国際基準であるGLOBALG.A.P.への関心、取り組みが、全国的に広まっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>1 理解度アンケートで、鳥取県の主要品目それぞれの「できている」評点が80%以上とする。</p> <p>「2年次」 スイカ、メロン（プリンス、エリザベス）、トマト（大玉、ミニ）、白ネギ周年栽培、ホウレンソウ、ブロッコリー。</p> <p>「1年次」 秋冬ネギ、ミニトマト、ホウレンソウ、秋冬ブロッコリー。</p> <p>「共通」 ・経営計画書作成：100% ・日商簿記3級程度の清算表作成：80%</p> <p>2 特別栽培農産物、有機栽培等の実施。</p> <p>3 生産工程におけるリスク点検（調製台、資材庫、機械庫の整理）</p>	<p>1</p> <p>「2年次」 ・各自の興味や進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。基本的にハウス1棟を管理させ、長期的な作業計画が立てられる実践力を養成する。 ・2年生は1年生の補佐を行わせる。 ・主要作業については、担当者に作業内容についてホワイトボードで説明させる。</p> <p>「1年次」 ・露地およびビニールハウスで栽培実習を行い、農業基礎技術の習得を図るため、数品種の作物を担当させる。</p> <p>「共通」 ・県内主要品目であるスイカ、メロン、トマト類、白ネギ、ブロッコリーの栽培を行わせる。 ・担当作物での就農を想定した経営計画書を作成する。（2年生：複数品目、1年生：担当している1品目） ・小テストの実施。（農業・肥料計算、栽培管理、簿記記帳、財務諸表）</p> <p>2 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施し、栽培管理履歴の記帳、特別栽培及び有機栽培認証のために必要な管理技術について理解させる。（特別栽培農産物3品目）</p> <p>3 生産工程管理に係るリスク点検について理解を深め、学生主導で改善に努める。 (1)調整室：異物混入の危険性、衛生管理。 (2)資材庫：肥料等の在庫状況を把握し、資材の無駄を省く。 (3)機械庫：燃料の間違い、整備不良の確認。</p>	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【花き】</p> <p>1 栽培基礎技術の向上と花の売れる時期を目指した栽培の徹底</p> <p>2 花き品評会への参加、県内先進農家への視察</p> <p>3 新たな需要・消費拡大への取り組み</p> <p>4 GAPの取り組み</p>	<p>花きの栽培基礎技術を習得し、新技術や本県に適する新品目の導入を積極的に行うことで、更なる栽培技術の向上を図る必要がある。</p> <p>花は嗜好品であり、必ずしも生活に必要なものではないため、需要・消費拡大を図るには、多種多様な人に花の良さを理解してもらう必要がある。</p> <p>国際基準であるグローバルGAP等への関心、取り組みが、全国的に広がっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>1・2</p> <p>・理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。</p> <p>3</p> <p>・理解度アンケートで花きの新たな需要拡大に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。</p> <p>4</p> <p>・生産工程におけるリスク点検（資材庫、農薬庫の整理等）</p>	<p>1 生産面では、学生に担当品目を持たせ、栽培管理を行うことで、基礎技術の習得、責任感の醸成を図る。また、花き生産では消費者が求める時期（お盆、彼岸、年末等）に出荷することが大変重要なため、開花調節技術等を取り入れ、常に出荷時期を意識した栽培管理を行う。販売面では、消費者に手にとってもらえる出荷物・商品の作成を目指し、花束、寄せ植え作成などの体験から、色の併せ方、使用方法、商品PR方法等について学習し、販売方法の改善・提案へと結びつける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進行管理 ・とっとり花回廊での研修 等 <p>2 「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催）」の中で開催される鳥取県花き品評会に出品を行い、県内花き生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花き品評会への出品参加 1学生あたり1点以上 ・県内先進地視察2回 ・県内農家研修1回/人 等 <p>3 新たな需要拡大として、「花育」活動を行い、学生自身の花に対する理解を深める。また、「花育」活動を通じて、花の良さの普及方法を体感する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「花育」活動 1回 等 <p>4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから優先的に改善活動を実施する。 	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【作物】</p> <p>1 農業機械操作技術の習得</p> <p>2 有機栽培技術の習得</p> <p>3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得</p> <p>4 GAPの取り組み</p>	<p>1 トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。</p> <p>2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。</p> <p>3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。</p> <p>4 国際基準であるグローバルGAP等への関心、取り組みが、全国的に広がっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度アンケート（よくできる、できる、もう少し、できないの4指標）でのトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できている」以上の評価が80%以上。 耕耘技術競技の実施 50分/10a以内が50%以上 <p>【参考】前年平均時間 49分41秒</p> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。 <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できている」以上の評価が80%以上。 <p>4</p> <ul style="list-style-type: none"> リスク点検及び改善箇所 1か所以上 	<p>1 学生の技術習得を図るためには、実習量を多くする必要がある。そのため、農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。なお、座学での学習時間も確保するため、学生数に応じた実習量とする。</p> <p>2 有機栽培技術導入ほ場を設置し、栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。</p> <p>3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培</p> <p>4 講義で学んだGAPに関する手法を実習の中に取り入れ、リスク点検及び改善活動について、学生への意識定着を図る</p>	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【畜産】</p> <p>1 家畜（牛）の繁殖、生理に関する基本的知識を踏まえた管理技術の習得</p> <p>2 家畜管理用機械の操作技術の習得、飼料用作物関係機械の操作技術の習得</p> <p>3 牛の繋養、誘導技術の習得</p> <p>4 GAPの取り組み</p>	<p>1 畜産コースにおいて、学生7名のうち、農業高校以外の出身者が4名（57%）、また非農家出身学生が3名（43%）と多いため、特に基礎的な知識・技能を重点に習得させることに力を入れている。</p> <p>2 畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイルローダー等）、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。</p> <p>H29年9月には5年に一度の全国和牛能力共進会が宮城県仙台市で開催され、農大の和牛1頭が系統雌牛群4頭セットで出品し全国4位になった。本年では乳牛及び和牛の共進会が県域あるいは地域で開催予定です。</p> <p>国際基準であるグローバルGAP等への関心、取り組みが、全国的に広がっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>1 理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価が80%以上に向上。</p> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度アンケートにより、コンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできる。マニユアスプレッター、ロールラッピングマシン、コーンハーベスター等の操作が1人でできることの評価。 大型特殊・牽引免許以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト、アーク溶接等）取得者割合50% <p>3（評価指標）各共進会への出品頭数（中部酪農祭2頭以上、県共1頭以上）</p> <p>4 牛舎周辺の資材整理</p>	<p>1 牛舎及び放牧場、運動場等における牛の発情行動及び便の状態などを継続観察させ、健康と異常とをチェックできる目を養い、健康に管理する方法を習得する。</p> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> ①飼料給与・調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械の操作④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の継続実施を図る。また、⑤飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫・調製作業）については体験実習を実施する。 就農就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。 <p>3 乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟（業界の求める人材育成）を図る。</p> <p>3 生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから改善活動を実施する。特に、整理整頓清掃（3S）に重点を置く。</p>	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
5	学生の農業機械操作技術の向上	<p>1 大型特殊免許とけん引免許の取得</p> <p>2 農業機械の操作技術の向上</p> <p>3 農業機械の点検整備技術の向上</p> <p>4 農作業安全意識の向上</p>	<p>1 就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で大型特殊免許の取得が必要。また水稲・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。</p> <p>2 卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。</p> <p>3 使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。</p> <p>4 農作業事故を未然に防ぐためには危険箇所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。</p>	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生の大型特殊免許の合格率(100%) 1年生のけん引免許の合格率(90%) <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 確認試験の合格点達成率 草刈り(80%)、耕耘(80%) <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 確認試験の合格点達成率 知識(100%)、実技(100%) <p>4</p> <ul style="list-style-type: none"> 農作業安全関連授業の実施(2回/5回) 校内ハザードマップ(仮称)の作成(12月) 	<p>1 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。(1日当たりの練習は、極力少人数で行い1人当たりの練習回数(乗車回数)を十分確保する)</p> <p>①大型特殊免許 4人/日、練習回数4回~5回/人 乗車回数16回~20回/人</p> <p>②けん引免許 5人/日、練習回数8回/人 乗車回数32回/人</p> <p>2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生を指導対象学生とし農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘について、補完的に追加実習を行う。(指導対象学生は各コース担任と相談の上決定)</p> <p>○刈払機(10名程度) ・重点指導期間(7月~11月)、実習(草刈り)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート</p> <p>○ロータリー(8名程度) ・重点指導期間(7月~11月)、実習(耕耘)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート</p> <p>3 授業を一部活用し、使用機械や使用可能性のある機械について、機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ○取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ○機械の取扱説明書の熟読、頻繁な目通しによる知識の向上を図る。(試験) ○機械の点検整備(日常点検・定期点検)の反復による技術の向上を図る。(実技・確認)</p> <p>4 授業を一部活用し、農作業安全の授業を設定する。また学生の事故防止の参考となるような啓発資料を作成する。</p>	<p>・ITの時代であり、ドローンなどあってもいいのではないかと。</p> <p>・刈り払い機の刃を留めるネジが緩むと機体の振動が大きくなる。そういうことも教えて欲しい。</p> <p>・熱中症の対処法や火災の対処法を教えて欲しい。</p>
6	社会情勢に即応した実践教育の実施	<p>1 実用性の高いプロジェクト成果の確保</p> <p>2 資格・免許取得</p> <p>3 地域社会活動への参加</p>	<p>1 農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動(卒論)を実施している。 平成28年度プロジェクト成果の果樹1件、野菜2件の成果を農業改良普及所果樹特技および野菜・花き特技研修会で発表した。</p> <p>2 卒業後の就農(自営、雇用等)に即応するため、大型特殊・牽引免許の他、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。</p> <p>3 1, 2年生ともに履修内容に地域貢献活動(ボランティア)盛りこみ、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている</p>	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> 各特技普及員研修会、果樹研究同志会、農協生産部等など校外での発表 <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 大型特殊・牽引免許(農耕者限定)以外の資格・免許取得者割合50% 日本農業技術検定合格者割合60% <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティア実施率100%(一人年2回) コミュニケーション能力向上講座(2回) 	<p>1 課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できる成果を確保する。</p> <p>2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保する。</p> <p>3 地域貢献に対する意識啓発とボランティア活動への積極的参加を促す。また、コミュニケーション能力向上に向けた講座を設ける。</p>	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	外部評価委員会からのコメント
7	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	<p>1 関係機関との連携による進路調整</p> <p>2 地域と連携した産地主体型研修の運営</p> <p>3 新規研修の周知</p> <p>4 新規就農の優良事例発信</p> <p>5 (GAP関連) 研修拠点施設の適正管理</p>	<p>1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきたところ。今後は、雇用拡大により経営発展を目指す経営体の育成とあわせた制度運用をさらに意識し、引き続き市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との意識共有を図り、研修生の進路調整を進めていくことが必要。</p> <p>2 先進農家実践研修は、就農予定地域での生産部等を主体とした受入体制構築が必須である。その調整には従前多大な時間と労力を要す中、6市町（鳥取市、八頭町、倉吉市、湯梨浜町、北栄町、琴浦町）で10件の研修を実施し、いずれの研修生とも就農（見込み含む）に至っている。運営開始から4年目となり、産地主導で研修を仕組む動きも新たに生まれている。</p> <p>3 就農品目の栽培管理基礎を習得するスキルアップ研修は、今年度、4ヶ月間の短期研修を創設した。白ねぎ、ブロッコリー、ミニトマト、スイカの野菜主要4品目に限定し、年5回開講する。新規研修であるため、当面、周知の徹底を要する。</p> <p>4 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事例が生まれている。今後就農を検討する方に対し、これら事例の情報提供は有効であるが、従前積極的に行えていなかったのが実状。</p> <p>5 農業学習館は、スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設であり、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として活用している。日々の整理整頓の徹底について、自営開始を志す研修生に意識付けしていくことが重要。</p>	<p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 産地主体型の新規開始研修 <p>3件</p> <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規研修（スキルアップ研修のうち短期研修）の受講者 <p>10名</p> <p>4</p> <ul style="list-style-type: none"> HPを活用した研修修了生就農事例の紹介 <p>10事例</p> <p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> 誰にでもわかる収納への改善と表示の徹底化 	<p>1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員の活動を通じて、研修生情報をはじめ、雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。</p> <p>2 湯梨浜町（東郷果実部）、倉吉市（倉吉スイカ生産部）など、産地主体型の新たな受入体制構築の動きと絡めて、研修ツールとして先進農家実践研修が活かされるよう、関係機関との調整を進める。</p> <p>3 各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していただけるようにする。また、JAの協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各JA広報誌への記事掲載を行っていく（研修修了後、研修生が各生産部に属することを想定）。</p> <p>4 今年度、まずはHPでの情報発信を行う（印刷物として事例集を作成よりも発信が早い。就農相談対応時に必要な事例を提示することも可能。）。</p> <p>5 改めて、農業学習館内の点検を研修生とともにやり、作業性を考慮した物品の配置と、わかりやすい収納のための表示の徹底を行う。</p>	<p>・研修生のゴールは「農業で食べていく」ではなく、これは土台である。「地元に根付き、助け合う」ことがゴール。地元自治会や普及所など関係者全てでバックアップできるように、溝ができないよう支援して欲しい。</p> <p>・一人でも多く就農に繋げて欲しい。</p>